

○ユキグニミツバツツジとサイゴクミツバツツジ (山崎 敬) Takasi YAMAZAKI: On *Rhododendron nudipes* ssp. *nudipes* and ssp. *niphophilum*

先にユキグニミツバツツジを亜種の関係でサイゴクミツバツツジから区別した(本誌 56: 363, 1981)。その時は果実の形を主な特徴として区別したが、よく調べてみると、花柄や萼、花芽の毛の生え方がかなり異なることが解った。ユキグニミツバツツジは花期に花柄から萼にかけて淡褐色の軟毛が密生する。サイゴクミツバツツジは花柄や萼筒は無毛か軟毛が散生し、萼の縁にのみ白色の軟毛が密生する。サイゴクミツバ系のキリシマミツバツツジは花柄にかなり毛があるが、ユキグニミツバ系のもの程ではなく、萼はほとんど無毛で、縁にのみ毛がある。ユキグニミツバ系のものは、花芽の下部の鱗片は背面が無毛で、縁にのみ毛がある。サイゴクミツバ系のものは、花芽の下部の鱗片は背面や縁に短毛が密生している。ユキグニミツバツツジ系とサイゴクミツバツツジ系のものは、葉の形の差異は微妙で難しいが、果実、花芽が異なり、花柄の毛の生え方も異なるので、花期でも、果期でも両者の区別は可能である。両者はそれぞれ別種として扱うのがよいと考える。

トクシマミツバツツジは果実が細長いので、分布は離れているがサイゴクミツバの変種として扱ったが、花柄から萼にかけて毛が密生し、花芽の鱗片は無毛である。この特徴はユキグニミツバ系に一致し、果実は異なるがユキグニミツバ系のものと考えられる。ツルギミツバツツジに近縁で、その蛇紋岩変性と考えるのが妥当と思われる。ユキグニミツバ系にはユキグニミツバツツジ、ダイセイミツバツツジ、ツルギミツバツツジとトクシマミツバツツジがある。ユキグニミツバツツジとダイセンミツバツツジとはごく近縁で、葉柄の毛の有無でしか区別できない。ユキグニミツバツツジはおもに日本海側に分布するが、近畿地方では南にも進出してくる。最近津山尚氏が淡路島の論鶴羽山で採集されたものがユキグニミツバツツジであった。これがユキグニミツバツツジの西南の分布限界と思われるけれども、小豆島や隱岐島などでは同一地域にダイセンミツバ型とユキグニミツバ型の両方の型がある。また岡山県の那岐山ではダイセンミツバ型がそれより西の阿波村深山ではユキグニミツバ型が採集され、また英田郡後山では両者の型が見られるなど、両者の接触地帯付近では区別が難しいようである。

これらの種類としての学名はダイセンミツバツツジが最も早いので、以下のように組み替える。

*Rhododendron lagopus* Nakai

ダイセンミツバツツジ

Nakai in Bot. Mag. Tokyo 40: 483 (1926).

*Rhododendron wadannm* Makino var. *lagopus* (Nakai) Hara, Enum. Sperm. Jap. 1: 39 (1948).

*Rhododendron reticulatum* D. Don var. *lagopus* (Nakai) Hatusima in Sci. Rep. Yokosuka City Mus. 15: 22 (1969).

*Rhododendron nudipes* Nakai subsp. *niphophilum* Yamazaki var. *lagopus* (Nakai) Yamazaki in Journ. Jap. Bot. 59: 210 (1984).

var. **niphophilum** (Yamazaki) Yamazaki, comb. nov. ユキグニミツバツツジ

*Rhododendron nudipes* Nakai subsp. *niphophilum* Yamabaki in Journ. Jap. Bot. 56: 363 (1981).

*Rhododendron nudipes* Nakai subsp. *niphophilum* Yamazaki var. *niphophilum* Yamazaki in Journ. Jap. Bot. 59: 210 (1984).

var. **tsurugisanense** (Yamazaki) Yamazaki, comb. nov. ツルギミツバツツジ

*Rhododendron nudipes* Nakai subsp. *niphophilum* Yamazaki var. *tsurugisanense* Yamazaki in Journ. Jap. Bot. 59: 210 (1984).

var. **tokushimense** (Yamazaki) Yamazaki, comb. nov. トクシマミツバツツジ

*Rhododendron nudipes* Nakai subsp. *niphophilum* Yamazaki var. *tokushimense* Yamazaki in Journ. Jap. Bot. 56: 364 (1981).

*Rhododendron nudipes* Nakai subsp. *nudipes* var. *tokushimense* (Yamazaki) Yamazaki in Journ. Jap. Bot. 59: 210 (1984). (東京大学理学部附属植物園)

○ヒメアメリカアゼナ日本に帰化 (山崎 敬) Takasi YAMAZAKI: *Lindernia anagallidea* (Michx.) Pennell naturalized in Japan

都立大学から依頼されて、牧野富太郎氏所蔵の未整理標本のゴマノハグサ科植物の同定をした際、標本の中に変ったアゼトウガラシ属のものがあった。瀬戸内諸島、Aug. 1933、牧野富太郎とあり、牧野氏が亡くなられた後で機械的に整理されたもので、正確な採集地は解らない。この植物は日本の野生種ではなく、北アメリカ東部の湿地に広く分布する *Lindernia anagallidea* (Michx.) Pennell であったので、1967年そのように同定して牧野標本館に納めておいた。標本が1枚しかなく、日本に帰化しているかどうか判らなかったのでそのままにして忘れていた。たまたま広島大学植物学教室の大学院でアメリカアゼナの研究をしている森田淳氏がこれを見付けて知らせて下さり、東大で同君と共に調べた所、京都府と千葉県で採集されていることが判った。ヒメアメリカアゼナと名付けてここに紹介する。

ヒメアメリカアゼナはアメリカアゼナ *Lindernia dubia* (L.) Pennell によく似ているが、葉が小さく、長さ 5-13 mm、幅 2-6 mm、基部は円形～くさび形で無柄であり、花柄は長く、その下の葉の 2-3 倍長である。アメリカアゼナの葉は大きく、長さ 8-30 mm、幅 3-10 mm、茎の上部の葉は無柄で基部が円形のものもあるが、下部の葉は柄があり、葉身は下部に次第に狭くなって柄に続く。花柄は短く、その下の葉より短いか同長でときにやや長いものがある程度である。こうした特徴で両者は明らかに区別できる。ヒメアメリカアゼナをアメリカアゼナの変種として扱い *L. dubia* var. *anagallidea*